



マスターごめんなさい、寝取り特化の特異点
私はこの子のママになります。



寝取られ
FGO 源頼光
ストーリー 117ページ
テキストレス 102ページ

ここはカルデア。これはとあるサーヴァントの二室が
特異点と化した話である。



ああ マスターじゃないですか…

ツツ

ツツツツ

レレレレ



何の用ですか？

私が置かれる状況
わかってますよね？

暇じゃないんですよ



サーヴァントの一人、彼女の名は源頼光。みなものよりみつ

女性でありながら170cm越えの高身長。
出るところは出て、締まるところは締まる、
メリハリのあるグラマラスなボディ。



特異点
怪異は今、彼女の自室で起こっていた。

頼光の自室の中には、謎の少年の存在が確認できる。

マスター似だが、少し年下。
いわゆる「シヨタ」と言える外見年齢。



何故か裸の少年。頼光の様子がおかしい事。
全ては、頼光の部屋が特異点と化したのが原因である。



裸の頼光、その体は汗だくで、性器の周辺は汗とは明らかに違う白濁色の液体に濡れている。

それは、特異点から発生した怪異と奮闘した証。

謎の少年

はははは...

ぬちやよ...

頼光の清楚さを体現したような、無毛かつピッチリと閉じたワレメから白濁の液体が溢れる。

粘っこいそれは、辛うじて液体だが限りなく固体に近い粘度。栗の花に近い臭いを放つソレが、精液であることは明確。



状況からして、あの少年の精液。
それが入りきらないほど頼光の胎内に注がれている。

頼光の子宮が、少年の遺伝子情報に占領されている。



荒い呼吸、裸の雌雄、女性器から溢れる精液。
そう、この2人。いや、2匹の番が子作りをしていたのは明白。

なんですか？

私がこの子と戦っている所を
見たいんですか？

まあいいですよ
見るだけならですが





ごめんね マー君

私
ママのマスターが
邪魔しちゃった

...

フムフム



ふふ… マー君ったら
まだまだ元気ですね
いいですよ ママが全部
搾り取ってやつつけちゃいます♡

とた、3んっ!

3んっ

…

特異点から現れたマスター似の少年の事を「マー君」と呼ぶ頼光。
「マスター君」を縮めて「マー君」なのかもしれない。

さらに、頼光自身は自分自信を「ママ」と呼称。
あくまでこれは、怪異に立ち向かっているだけ。それが頼光の主張である。

あマスターはそこで
見ててください

当のマスターは部屋の隅で縮こまる。
特異点と化した部屋の影響か、彼の衣装は消失し全裸に。
頼光たちが全裸なもの、これと同じ現象だろう。







おちんちん
ギンギンですね♥

おちんちん おっきい♥
マスターの10倍はありそうです

あ別にマスターのチンポが
しょぼいわけじゃないですから
落ち込まないでくださいね



そんなに押し付けられると…

ママもイってしまいます…っ♡









入れられただけで
イっちゃいました♡

マスターのチンポよりも
立派なんですもの…♡





ぬちゃあああ...

うっ

ジュク
ジュク...

ジュク
ジュク...

誇らしいですね♡

おしりやう

それじゃマー君
自分で動いてみようか?

マー君のテクをマスターに
見せつけてあげようね♡







交じり合う生殖器、絡み合う粘膜、ぶつかり合う肉体、混ざり合う体液。
パンッパンッという小気味いい打撃音が狭い個室に響き渡る。
それに和音のように混ざり合う頼光の嬌声。

普段の清楚な彼女からは想像できないほど本能に素直な声色。
これが源頼光の本当の姿、マスターが知らない姿なのだ。



不器用ながら腰を振り打ち付ける少年、
その動きはメスを満足させるものと言うよりは、
自分が気持ちよくなるための独善的な物。
その証拠に、少年が腰を打つ度に頼光の腹が内側から大きく持ち上がる。
自分がどれほど非常識なペニスを持っているのかわかっていないのだ。
拙いゆえに女体の耐久性を無視したセックスをしてしまっている。

そんなぎこちなくも凶器じみたペニスを持つ少年のセックスを、
嫌がる素振りは一切見せず、頼光の生殖器は深々とオスを受け入れる。
まるで優しく抱擁するようだ。





日々精進してえらいですね♡

気持ちいいところに当たる…♡
ママの弱いところしっかり覚えて
あっぱれあっぱれ♡

はあ

はあ



ああ マスターは気に病まないでください
マー君のおちんちんが良すぎるだけ

私のおまんこと たまたま
相性が良かっただけですから

マスターは何も悪くないですよ？

事が終わったら、マスターのもとに
戻りますから。私はサーヴァントですので。



ぬちやあああ.....

.....
なあにマー君？

ママをマスターに返したくないの？
もう...っ♡ しょうがないですね♡

それはマー君のがんばり次第です

おしりかきうっ

おしりかきうっ



え？ もう射精しちゃいそう？
早漏さんなのは変わらないですね。
大丈夫、これから少しずつママの
おまんこで練習していきましょーうね









どろろ

みち

ママ… 忸度なしで本気で
イっちゃう…♡

こんなに気持ちいの…
マー君が初めてです♡

マー君の精子で
お腹いっぱい…♡

どろろ

その射精量は怪異特有のものか、
あまりに大量の精液で頼光の腹が膨らむ。
膨らんだ腹は、まるで少年がマーキングした証拠のようだ。

頼光は嫌がるどころか恍惚の表情を浮かべる。
目の前にいるマスターのことなど目に入らっていない振り舞い。
これが、本当にサーヴァントの姿なのだろうか…。



ふふ…っ♡
オスっ気タツプリの
種付けですね♡

ママを孕ませようとする
悪い子おちんぽ♡

けど前より上手になりましたね♡
射精量も多くなってます♡

男の子らしい成長が見られて
ママは嬉しい限りです♡





あーっあーっあーっ

ズルズルズルズル

うん

うんうん

うんうん

2発目するんですか？
うんうんー発だけじゃ
足りないですよね♡

いいですよママに
全部ぶつけてください♡























ん？ なぁに マー君
スツキリしましたか？

...

じゃあ お掃除
しましうね ♡





事が終わり、頼光は少年のペニスを「お掃除フェラ」していた。

男性器を舌で愛撫するように、絡みついた体液を舐めとる。
自分を犯した凶器を、我が子を愛でるように優しく扱う。

ポウウウ

無様に膨らんだ頼光の腹、中身は少年の精液のみ。
元の引き締まったウエストの面影はなく、
まるで本当に妊娠しているような姿。

まんこから溢れる精液は濃く、まるで突きたての餅のように粘っこい。
こんなに濃い精液が、腹が膨れるほど子宮に詰め込まれている。



もはや孕むことは時間の問題。

それは、火を見るよりも明らか。

精液を満たされ膨らんだ腹、
早くも頼光の体に変化が現れた。

アッてー

ウス
ウス





こんなに一生懸命に私を犯して
こんなにたくさん
赤ちゃんの素を出してくれた…♡

愛おしくてたまらない…♡

Inte~



孕んであげたい...♡
この子の赤ちゃん...♡

産んであげたい...♡

Inte...

いねま





これって...

母乳...!?

!!

マー君…
ママの旦那さんになっちゃうかもですね♡

私の母性を、飢えた庇護欲を満たしてくれるのはこの子だけ。

マスターがこの子みたいに甘えてくれないのが悪いんです…。私、この子のママになっちゃいますよ？ 良いんですかマスター！

ちゅるるる

Ag Ag

W the W the



唐突に溢れる母乳。頼光は妊娠してしまったのか、いや、妊娠したとしても早すぎる母乳である。

要因は頼光の高すぎる「母性」。

孕んであげたい、産んであげたい、育ててあげたい、そんな母性が高まりすぎた内的要因に加え、「精液ボテ」という疑似的な妊娠状態という外的要因。それらが合わさり、頼光の体は母体として役割を果たそうとしていた。

そして、この番いの物語はまだ始まったばかりである。



翌日

頼光には自分の所に帰って来て欲しい。

あの凛々しく優しい頼光だ、もしかしたらあの少年を倒し、
自分の所に帰って来てくれるかもしれない。
そんな一縷の望みにかけて、再び頼光の自室を訪れる。

怪異





はぁ...

なんですか？ マスター
性懲りもなく また来たんですか？

昨日よりも冷たい態度の頼光。

まるで、恋人との関係に水を差されたような、
恋路を邪魔された者の表情。

何かを中断され、やむなく応対しているような様子だ。





ああ そういえばもう
元マスターでしたね

私、もうマー君と
隷属関係を結んでいるので。

元マスターの入る
余地なんてありませんよ？



この体を見たらわかりますよね？
私はもうマー君のもの。

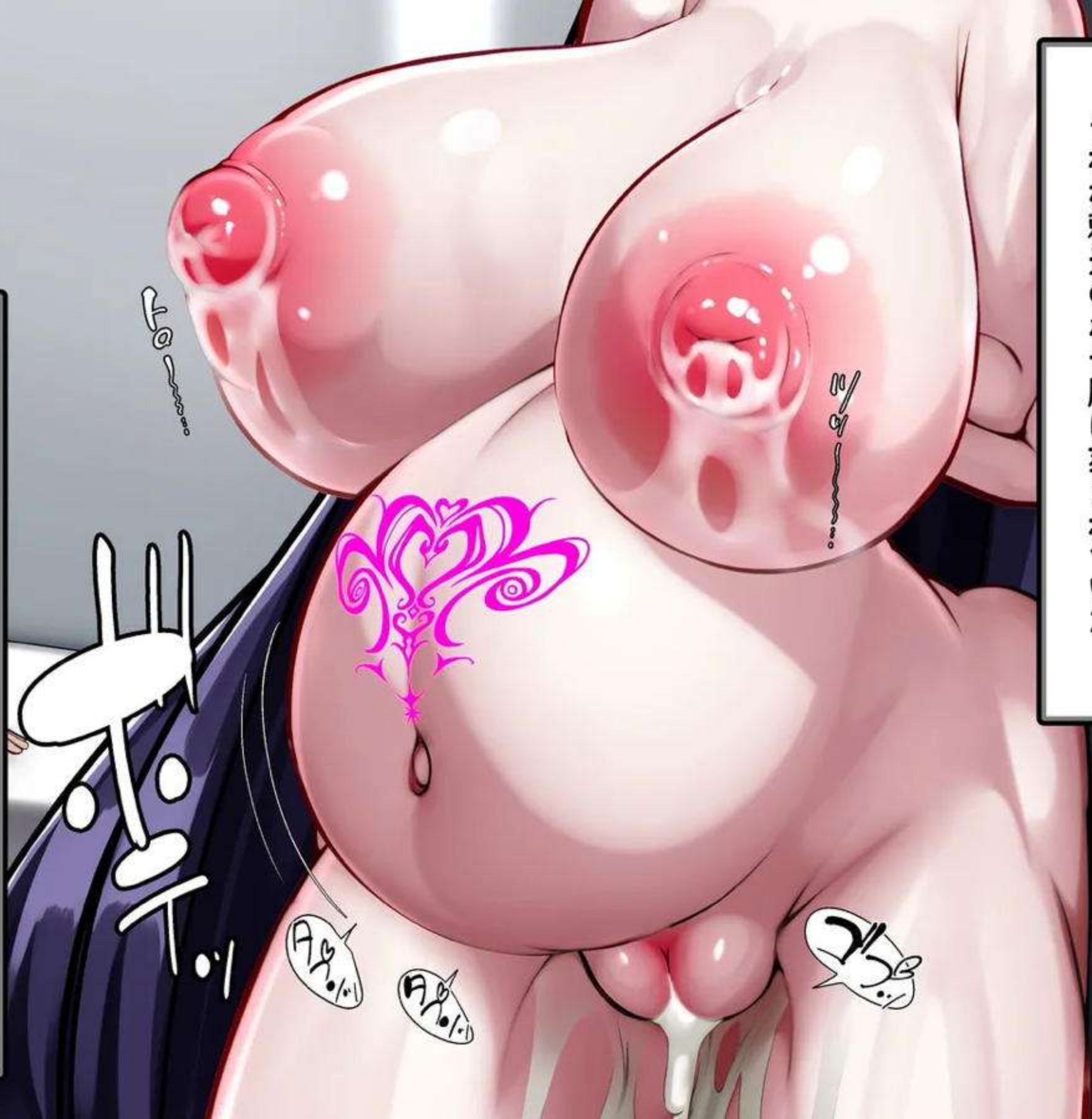
「隷属」というか「服従」がもっと正しいかもですね。

マスターとサーヴァントの関係よりも
濃密で心も体も繋がっているんです。



それはまるで「令呪」、従属の証だ。
それが頼光のボテ腹に刻まれていた。

刻まれた場所もさることながら、
女性器と子宮を連想させるその形が、
いわゆる「淫紋」を想起させる。





マー君 ちょっと待ってね♥
すぐ終わるから
エッチの続きシようね♥

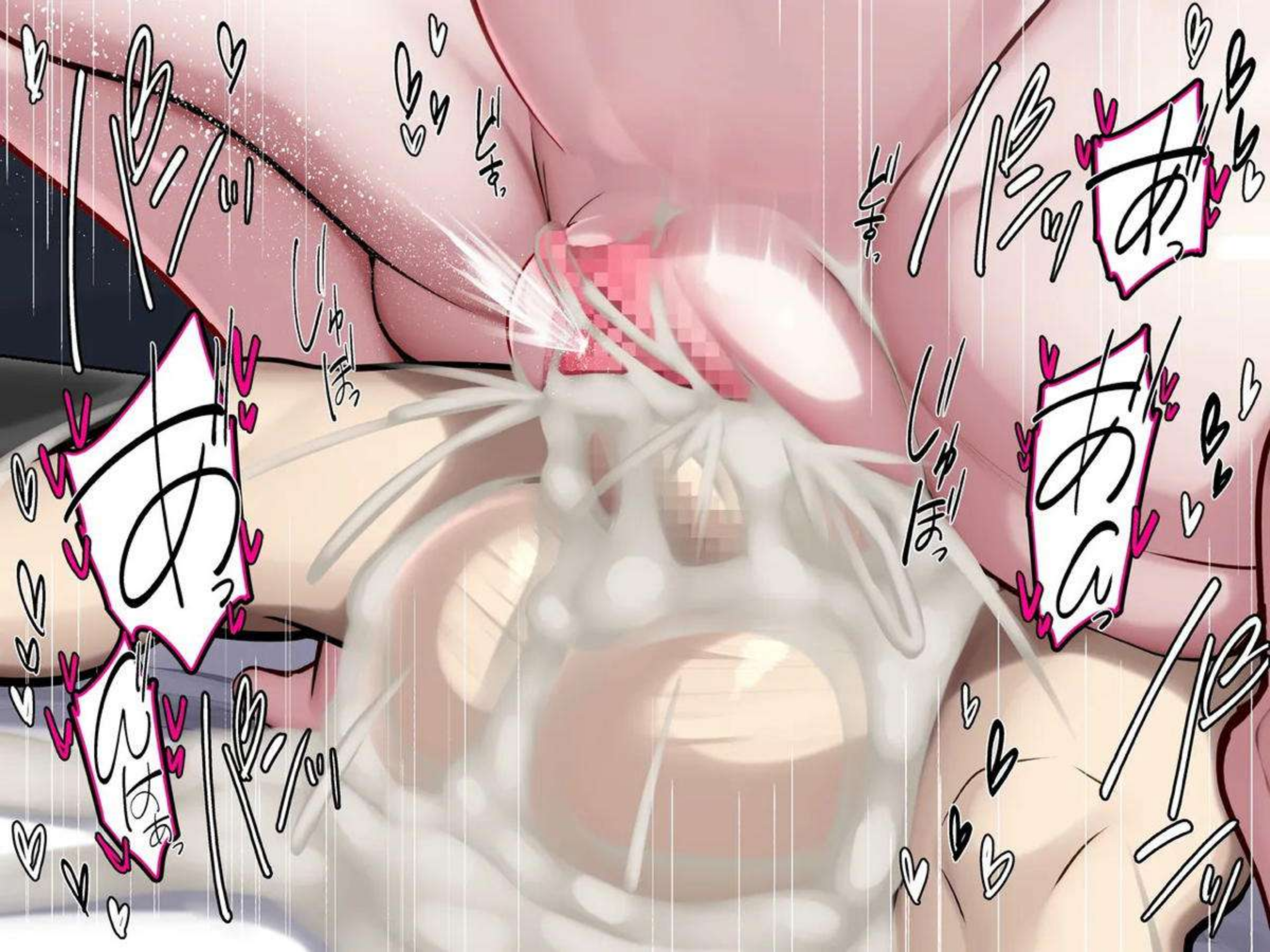
で

どうします？

これ以上マー君を
待たせないでくださいよ

見るだけならいいので
それでいいですよ？







すっごくおおい!

マー君のちんぽ...っ♡

あー

マスターの知らない頼光の一面をこの少年は知っていたのだ。
頼光の心は先日よりもマスターから離れていた。

先日とは異なり、頼光は自ら腰を振る。
その姿に、元の凛とした清楚な面影は全くない。





グリグリ〜っ!
くう〜っ♡ 奥あたるう〜っ♡



オチンポ気持ちいい〜っ♡

オチンポ気持ちいい〜っ♡



ふう〜〜〜っ♡
おちんぽイキそう
なんですか？



ママの腔^{ナカ}内に射精^だしなさいっ！









ママの卵子に会いたがってる
寂しがり屋の甘えん坊な精子♡

射精量も元マスターとはケタ違い♡
それにプリップリの濃ゆ〜い精液♡





もっと頂戴あ〜い♡!

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

あ〜

マー君の精子…っ♡
全部ママが搾り
取ってあげるねっ♡





さあ… 出してくださいっ♡
母の中に…っ♡ その欲望を
全部ぶつけてくださいっ!!







精液を注がれ、膨らみ過ぎた頼光の腹。
ついにはヘソがボコッと飛び出てしまう。

膨らんだ腹の内圧に耐えきれないヘソが飛び出る
いわゆる「妊娠出ベソ」、それが胎児ではなく精液で起こった。

マスターは一線を越えたような感覚を覚えた。
あの膨らんだ腹には、自分の物ではない精液がタップリと詰まっている。
頼光のかつてのシユツと引き締まったお腹は無様に膨らんでいる。

受け入れがたい現実の連続。だが、マスターを最も追い詰めた現実とは、
当の本人、頼光自身が今まで自分に見せたことのない、
幸せそうな表情をしていることだった…。





精子くんたち、ママのお腹に
帰ってたかったんだよね♡
みんな、お家におかえり♡

アッ...!
ちゃっ!
ちゃっ!
ちゃっ!

母性に満ち溢れた言動。

精子ですら、我が子のように愛おしい。
それが源頼光という女性の母性。

「甘えられたい」「甘やかしたい」
マスターでは満たせない頼光の欲望。

この怪異の少年も、頼光のそんな欲望から生まれた、
欲求を満たすために特化した存在なのかもしれない。





ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽちゅぽちゅぽ

ちゅぽちゅぽちゅぽ











マー君の精子
もふんのへへひ…
おいしいよ
ほいひいよ…♡



膣だけでなく、口での奉仕も自ら進んで行う頼光。

しかも出された精液を何一つ嫌がることなく
飲み込み胃袋を満たしていく。

このまま、彼の精液が消化吸収され、
頼光の血肉に変わるのだろうか。

もはや、元マスターの精神は限界を越えていた。





アイツ

ふふっ♥
尻尾を巻いて
逃げちゃいましたよ?

ちよつと元マスター

待ってくださいよ

伝えたいことがあるんです



邪魔なので

明日から
もう来ないでください



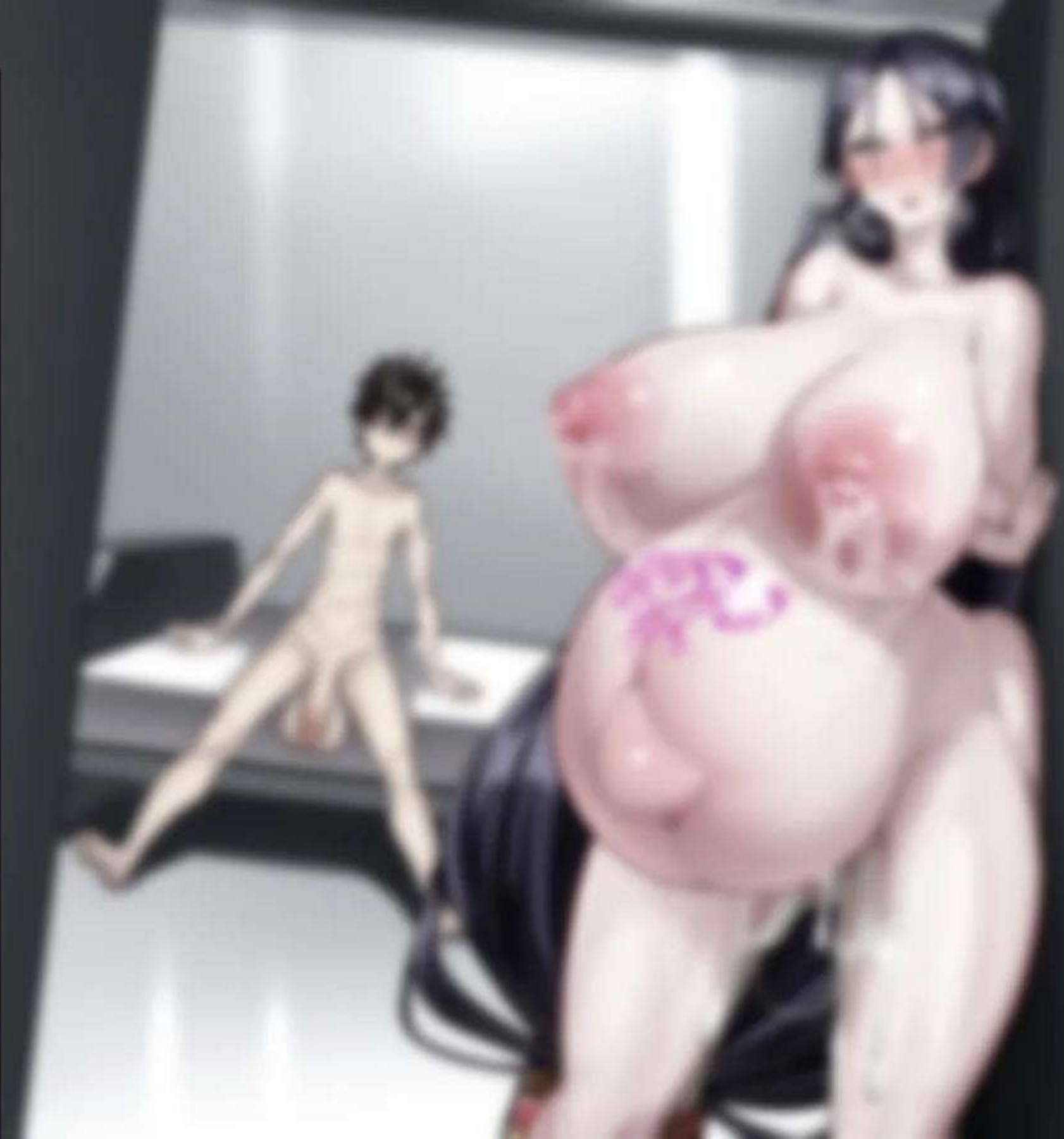
この部屋はマー君の縄張りで
私はマー君の番いなんです

私たちの恋路を邪魔したら
排除しますよ？



こうして邪魔者は排除され、頼光の部屋に春が訪れた。

巢作りを終えた番いは、子作りを再開する。
二人だけの空間、文字通りの愛の巢。



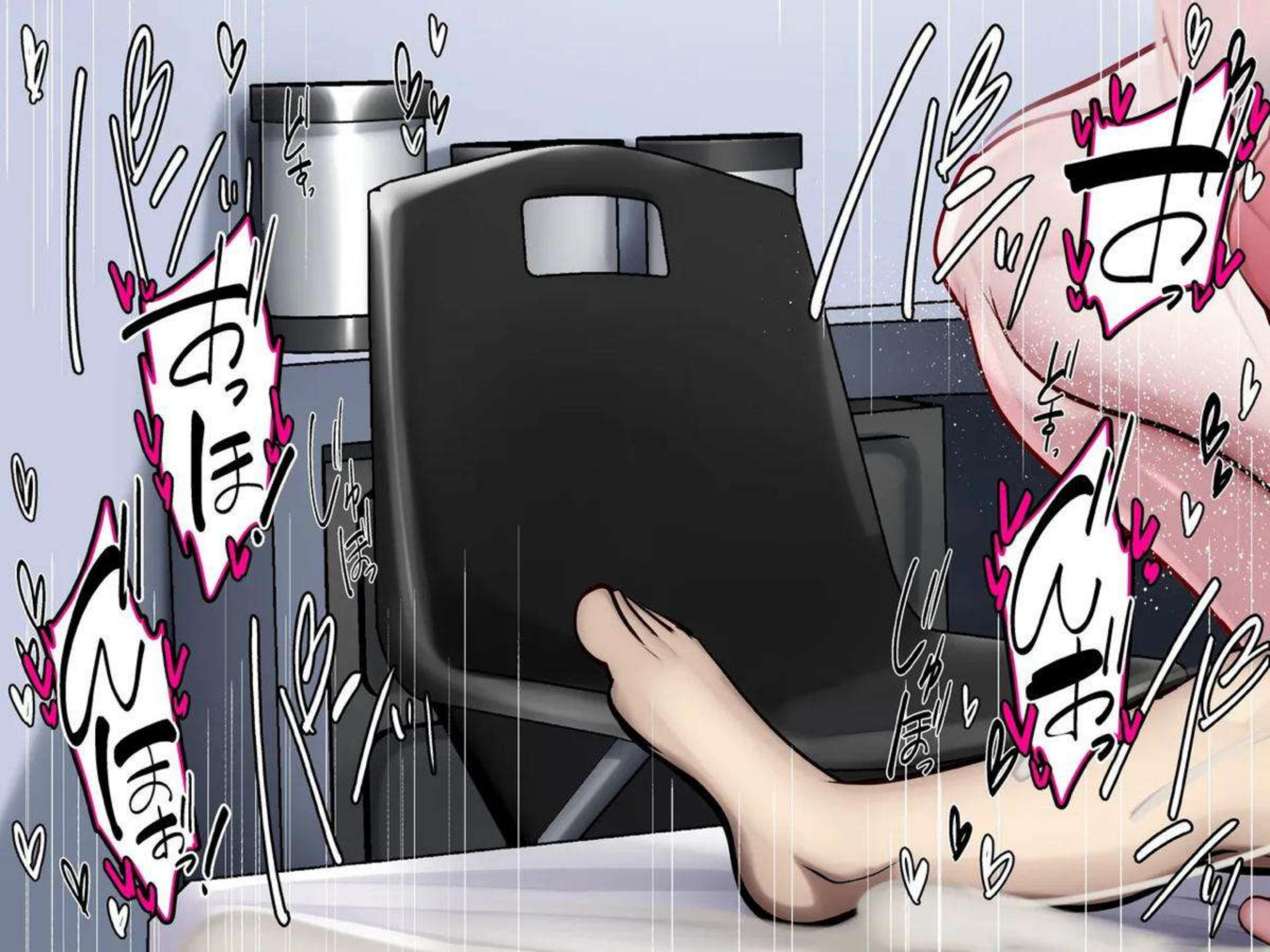
この日から、カルデアで頼光の姿を見ることは無くなったという――

マスター
邪魔者を排除した愛の巣。

頼光の部屋

巢の中の番いは、以前に増して行為を激しくし、互いの愛を確かめ合い、子孫繁栄に励んでいた。















ねえマー君
そろそろ本気で…
パパになっちゃおうか♡

Eh! Eh!

Gyuuu





あッ!!!

ママの卵子...っ♡
孕ませてえええっ!!

アッ!!!

アッ!!!













遺伝子混ぜ混ぜ〜…♡

上手にできました♡

トク



たくさんデキましたね♡

おめでとう



さらに膨らむ頼光の腹、もはや妊婦と言う次元ではない。
大きめのバランスボールのような大きさ。
しかもその中では、新たな命が生まれていた。

頼光の遺^卵伝子と少年の遺^精伝子が混ざり合った愛の結晶。
受精卵となったそれは、生きている証に細胞分裂を始める。

しかもその数が異常だった。
無数の受精卵、愛の力が成せる業。

通常、排卵は1度に1個。しかし、少年を想う
頼光の愛情が、そんな道理を覆したのだった。









頼光に電流走る。
チクツとした小さな衝撃が腹の中で無数に起こった。

目には見えないが、それが「着床」によるものだ と確信した。
脳裏に浮かぶ、受精卵が子宮内膜に癒着する映像。

頼光は改めて悟った。自分は母となり、
この少年は父となるのだ。

もはや彼女の意識に、
かつての主人の存在など存在しない――

マスター



終

制作・著作
かわはぎ亭















































































































